

麦王・麦翁 権田愛三

玄孫・十九代 権田不二夫

権田家 15 代の家督を相続

権田愛三は、嘉永三年（1850）七月二〇日に、幡羅郡東別府村（現・埼玉県熊谷市）に生まれた。権田家は、慶長年間より農業をもって家業を継承し、代々名主、百姓総代、戸長などを勤めた家であったが愛三の祖父の代に権田家は破産の状態に陥っていた。そのような状況の中、愛三は権田家 15 代の家督を相続した。



家督を継いで間もない明治四年、大里・幡羅・榛沢三郡の肥料及び製藍商同業者を集め、会社「開誘社」を組織し自ら社長となり、

世人にも認められ、明治一〇年には、東別府の戸長に挙げられた。明治一七年には、幡羅郡西別府村外 6 ヶ村連合戸長を拝命し、ますます村のため奔走した。

しかし、これが仇となり家に中を顧みることなく、会社経営に失敗してしまった。

再起を期し、古物商を始めたが、高買いの安売りで、残るのは借金ばかりだったという。結局、人が良すぎて商売人としては失格だったようだ。

麦作改良に目覚めて

明治二〇年、10 年間務めた 6 ヶ村連合戸長を辞めた冬、愛三は寒さ凌ぎのため麦を踏んでいた。しかし、これが愛三の麦作改良を志すきっかけとなった。寒さ凌ぎのために踏んだ麦は、他の麦と比べると分けつが多く、茎も太く、全体に勢いを感じられるほど成長していたという。

愛三は、麦は踏めばよいということを知っていたから踏んだのである。江戸時代の三河の農書「百姓伝記」には、麦踏みの仕方とその効果が書かれている。まさに、人生の転機であった。

「麦踏み」には、霜柱の防止、風による土の移動の防止、土壤水分の分布の均一化という土に対する作用と、麦の根張りを良くする、分けつを促すという麦自体への作用がある。踏みつけるというのは、麦以外には行わない特殊な作業であり、現在もローラーをつけて、1，2，3月の3回に分けて行われているようだ。

だが、「麦はほったらかしのようにつくるもの」という当時の通年のもと、誰も麦踏みなどをやる者は無かった。

翌明治二一年には、村人をも巻き込み、村の農事発達、農業思想の開発、多収穫の試作、あるいは3毛作農法の研究をすることを目的として「青年農事奨励会」を設立した。

明治二二年には、「土入れ」を始めた。麦間に土を入れるのである。著書には「麦作に土を振り込みますのは、最初志那の農書にありましたことで、それを私が応用いたしました」始めたと記されている。

しかし、「麦踏み」も「土入れ」も一部の地域の留まり、愛三以前、全国に普及するのをみていない。また、「麦踏み」、「土入れ」よりも最も愛三が声を大にして提唱したのが土作りである。「肥料は自分で作る」、すなわち堆肥である。著書に「堆肥の如きごみがいりまして土と申します。堆肥のはいりませんものは土ではなくしてただの地であります。地にては作物は能く出来ません」と記されている。麦わらはすべて堆肥にした。少しの無駄もなく、経済的増収をも考えていた。

愛三の栽培法は、誰言うことなく「権田式」と言われ始めた。

明治二五～二八年頃の大麦10アール（1反）当たり平均収量が3俵余りであった当時、愛三は、明治二九年、10アール当たり平均13俵余りという驚異的な収穫を上げたという。

「権田式麦作法」の普及活動

明治二七年の日清戦争は、農村に対して食料の増産を強く要望した。この年、東別府村の農会長となるが、12月東京市芝公園内弥生館で開かれた全国農事会に出席し、埼玉県農業がいかにか遅れているかを知らされ県内遊説を始める。

またこの頃、若者の養成のため県立農業学校（現・県立熊谷農業高等学校）の設立と、埼玉県下の農業の指針たるべき県立農事試験場（現・埼玉県農林総合研究センター）の設立を実現すべく運動を起こした。結果、どちらも現在の熊谷市内に設置をみている。

明治四一年に、自身の麦作栽培法を農商務省に上申した。愛三が提唱し、実験した麦作栽培法は、普及、宣伝に努めた結果、その実効が上がるのと相まって、だんだん各地に響き渡り、講演の申し込みが多数にのぼり、各県からの招聘が続いた。

愛三の講演の旅は、北は岩手から南は鹿児島まで、ほとんど全国に及んでいる。

愛三は「ボロ先生」とも呼ばれていた。格好を飾らず、請われれば何処へでも出かけて講演をした。そのため、公演先で依頼人が駅に出迎えても、愛三があまりにボロを着ていたため発見できなかったということが多々あったようだ。

また、鹿児島や熊本、福島、新潟などからやってきた伝習生を受け入れ、麦の種蒔き期から翌年の収穫期まで、7～8ヶ月間、実習を行っていたようだ。

そしてなお、大正一二年には、自身の研究成果に基づいて「実験麦作栽培改良法」を著し、自費出版し、数千部を無料で希望者に配布した。

愛三は、その功績により大正三年、緑綬褒章を賜ったのを始め、生涯で数十回の表彰を受けている。

愛三は、最後の伝習生を茨城県の自宅に送り届け宿泊中発病し、翌昭和三年八月一九日、79歳で死去。生家の隣、香林寺に葬られている。

昭和一〇年（1935）、愛三を慕う人々により、別府村役場に「権田麦翁碑」が建てられた。現在は、別府農村公園に移転され建っている。

（熊谷市公連だより

第17号 平成26年より）



権田麦翁碑